会議名称	平成 30 年度第１回門真市文化芸術振興審議会
開催日時	平成 30 年 10 月２日（火）午前９時 50 分から正午まで
開催場所	門真市立総合体育館２階　研修室
出 席 者	（委員）　清澤委員、本田委員、朝倉委員、木ノ下委員、登委員、 勝川委員、垣内委員 【出席人数７人／全７人中】 （事務局）宮本市長、重光市民生活部長 丹路文化・自治振興課長、文能課長補佐、柴田主査、市瀬係員 シンポジウム参加者 13 人
議　　題 （内　　容）	１．門真市文化芸術振興審議会の視座と意義について ２．文化芸術振興審議会委員によるシンポジウム テーマ～文化的な視点を持ったまちづくりの推進」
傍聴者数	１人
担当部署	（担当課名）市民生活部　文化・自治振興課 （電　　話）06-6902-6034（直通）

【事務局】

それでは、定刻になりましたので、審議会を開催したいと存じます。

皆さん、おはようございます。本日のシンポジウムにご参加いただきましてありがとうございます。

まず、本日のシンポジウムの趣旨についてご説明いたします。

本市では、平成 19（2007）年４月に府内では４番目に「文化芸術振興条例」を制定し 22（2010）年１月には文化芸術振興基本方針を策定いたし、これまで市民・事業者・市との協働をベースに振興施策を展開してまいりました。

本基本方針が来年で 10 年が経過したこと、また、国においても、文化芸術振興基本法が昨年、文化芸術基本法に改正され、地方公共団体においても、文化芸術推進基本計画の策定が努力義務とされたところです。

もとより、本市条例には、お手元の資料にありますように６つの「基本理念」を掲げておりますが、第２条６号に「文化芸術的視点による都市景観の形成」をうたっております。都市景観のみならず、文化を身近に感じ、子どもたちが文化にふれる機会の充実など、市として「まちづくりの中に文化芸術的視点を持つ」ことが大切と考えております。

さて、本市では毎年２回文化芸術審議会を開催しております。30 年度１回目の審議会は、人事研修の一環として市職員有志参加の下、審議会７名の委員を代表していただき、学識経験者として加わっていただいております３人の委員から提言を頂戴し、職員各位の意識の向上につながればと願って開催いたしました。

なお、31・32 年度の２カ年で、先ほど申しました「文化芸術推進基本計画」を策定することとしておりますが、本日の参加職員の方々には、そのワーキンググループに、ぜひ、ぜひ参画いただいて、策定の過程で市民の方々とともに文化資源を生かしたまちづくりにチャレンジいただきたいという強い願いを込めての開催でございますので、何卒よろしくお願いいたします。

【事務局】
　では、ここで審議会委員の皆様をご紹介いたします。
　まず、中央が清澤会長でございます。現振興基本方針策定からずっとかかわっていただいております。そして、本日提言頂く　御三方の委員向かって右から本田委員、木ノ下委員、朝倉委員でございます。続きまして市民委員のお三方、右から　勝川委員、登委員、そして、左側、垣内委員でございます。さて、本日は市長にも臨席いただきました。では、一言市長にごあいさつを頂戴いたします。

【市長】
　審議会委員の皆様には、ご多忙の中ご出席いただきありがとうございます。
　今年度の第一回目の審議会は、「文化的な視点を持ったまちづくりの推進」というテーマで、識者の方々からご助言いただけるということでありまして、市職員も多数参加させていただいております。
　文化度の高いところに文化の高い人が集まってくるのか、文化の高い方々がたくさんいらっしゃるところに文化度の高さが出てくる地域づくりができるのかというのはひとつ、変かなとは思ったりしますが、本日のお話を聞かせていただきながら、地域と人の都市魅力をどう高めていくかっていうところに光が当たればと思っている次第でございます。
　簡単ではありますが、私からのご挨拶とさせていただきます。どうかよろしくお願いします。ありがとうございました。

【事務局】
　ありがとうございます。では、さっそくシンポジウムに移らせていただきます。進行は、会長にお願いたいいたします。よろしくお願いいたします。

【会長】
　それでは私の方から説明させていただきます。次第にございますように、最初に審議会の立場みたいなことを、私の方から、これからの審議会の動向なども含めて話をさせていただきまして、各委員に、あらかじめこちらからはお願いしていないということもありますが、ご自由に、市あるいは審議会の進行のあり方とか、さらには、各分野・方面でのご意見、ご経験をお持ちと思っておりますので、そのあたりのことを聞かせていただきながら、その後、質疑応答ということで進めてまいりたいと思います。
　最初に現在の審議会の方のメンバーで一年間、そしてまたこれからの何年間かも一緒にいろいろ相談させていただきながら進めていこうかと考えておりますが、私見として、その立場といいますか、あり方について、審議会会長メモとして表してみました。
　私自身はこの数年間ずっと関わらせていただいておりまして、その中で持ちました感想とかも含めて、今後の審議会のあり方として、こういう方向にいくのも一つの在り方かなということであります。これは全く個人的な意見でありますが、今回のシンポジウムの

一つの枠組みになればということで、出させていただきました。これは各委員さんに特に同意をいただいているわけではございませんので、このあたりのことのご意見についても、シンポジウムの中でお話しいただいても結構かという風に思っております。ご参加の皆さんにもわかっていただけるよう、要約された骨子案のようなものとしてまとめさせていただきました。

本日こうして、市役所内部で文化振興芸術等に関心を持っておられる方を中心にお集まりいただいているということでありますが、現在、市でうたっておられたように、公民協働ということで、市民との協働の中で文化振興を進めていこうという事が基本方針になっているわけですが、やはり行政施策として芸術文化振興ということになりますと、市がやはり、先導役となって、そこに市民が加わっていくというかたちが本来なのではないかと思います。

市長のお話にございましたように、文化度の高いところ、あるいは文化に関心のある人がどのくらいいるのかということも大きな分かれ目になろうかと思っておりますが、その点で申しますと、市民に過大の期待をかけすぎず、やはり最初は少し市でリーダーシップをとっていただいた方が良いのでないかと思いますので、そのためには、芸術文化振興策を市としてどうまとめていくのかということを、特に庁内中央内部での有志の横断的チームを立ち上げて、そこで議論し、結果、その施策の「たたき台」として立案されるのが望まれるところです。

それを立案作業進捗の段階ごとに、審議会の中でお互いに議論、精査させていただくということが良いのではないかということで、まず有志チーム立ち上げに繋がる最初として、今日、第一回目シンポジウムという形で持っていただいたと思っております。

元々私が思っておりましたのは、まず芸術振興ということですが、市の行政推進の基本において、どういう意味合いがあるのかということであり、少し要約した文章で書かせていただきましたが、基本的には市民生活の質の向上だとか、精神文化の向上あるいはシビックプライドといいますか、市民に誇りを抱かせる事に繋げていくというのが基本的な目標でありますが、そういう精神的な、抽象的なものだけではなく、発信力、魅力のある芸術文化振興策の効果的な推進によって、それらが市内だけではなく、むしろ市の外へと発信されていくことで、外部から見える、あるいは受け取る「門真市のイメージ」が向上すること、これが大切なことではないかと思います。

魅力の向上、イメージの向上は、住むところを、これからを決める新しい市民の誘引、市民数の増加につながり、永住都市・門真の実現、税収の向上にも繋がるでしょうし、あるいは市の魅力が高まると、駅前だとか、あるいは開発地域の中に新しいオフィスだとか店舗が誘致される、その中で税収増加、市としての活性化がさらに刺激されるといったことで、前述しましたが、精神的なものだけの向上という風な意味合いを持ちがちですけれども、実は自治体・門真の都市経営に非常に大きなプラスになるようなものではないかと思います。丁度、民間企業における、業績向上のための戦略としての、ブランド形成、そのための広報戦略と同様であると言えなくもないと思います。

市としても同じような取り組みはとても良いのではないかなと、ですから必要な教育、福祉等行政施策の推進は当然であり大切ではありますが、加えて、ブランド戦略市の芸術文化活動の発信力を高めて、市内よりむしろ市外から門真に目を向けさせる、その手段として極めて効果的なのが文化芸術であり、その文化芸術を活かした施策があっても良いのではないかなと、審議会としても、そういう方向性、思いを持って、文化芸術推進基本計画を整理していったらどうか思っているということでございます。

じゃあ具体的にどんなものになるのかということを申しますと、これは従来から審議会の中でずっと進めさせていただいたことでございますけど、いわゆる既存の文化芸術活動の応援と向上のための提言は大切な部分だと考えます。

非常に熱心な団体も多いですし、かなり集客力のあるようなものも当然あるだろうと思いますし、これにつきましては、それぞれの評価なり見直しなり、これは着実に進めていくという事は当然必要だろうという風な事は思うわけですが、基本的にこれらの活動というのはどちらかというと、市民による市民のための市民の活動という風な感じになっていると思います。立ち上げから実施完了まで全てが一部市民の内部充足的であって、一般市民の人たちが行ってみようかなとか、あるいは外部に発信をして市外の人々までという風な形にはなかなか至っていないのではないかということが、かなり多いのではないかという感じはいたします。従いまして、市の内部での自己充足的な文化活動ということですね。これは基本で大事なわけですけども、そこに留まっていると、大きな向上は難しいのではないかと思っておりましてですね、発信力といいますかそういう所ですね。

そういうことで、もう一つの柱としまして、鑑賞啓発型といいますか、市の方が自主的、積極的に外部のいろんなものを引き込みながらやっていくのが事業活動、文化活動というものが必要ではないかなと。

そういたしますと、それなりに発信力もあり、また相乗効果のための地域連携なんかも出てくるかなと思いますし、そうすれば、他地域から市の方に人々（鑑賞者・参加者）を誘引してくるといったことも可能ではないかなと思います。

施設としてはルミエールだとかいろんな施設が揃っていると思うので、内容が充実すれば、強力な発信力を持てるのではないかと思うわけで、それが鑑賞啓発型ということですが、具体的にはどう進めていったらいいのかということで、そのあたりを、是非、市役所内部の有志文化立案チームで議論し、提案していってほしいということでございます。審議会も加わって、支援、意見交換を進め、ある段階で市民の意見もとりいれてゆくのが望ましいでしょう。

基本的には市役所の中におられます芸術文化施策の立案部局、これが当然あるだろうと思います。それと、他の部局、もし市の内部で積極的にその事業をやろうとすると、芸術文化施策立案部局だけでは実施できませんので、当然諸部局が関連するということで、横断的なチームで文化芸術振興を発案、討議できるようになると、非常に内部としても進めていき易いのではないかということで、そういうチーム、いわゆる有志プロジェクト

チーム立ち上げを、と提案させていただきました、本日いろんな部署からそういう文化芸術振興に関心のある職員の方お集まりいただいたのではないかなと思います。

具体的な作業といたしましては、審議会で基本計画を作るわけですけども、素案ですね。素案につきましては、外部の外注的なかたちで、専門コンサルがおりまして、それが素案を作って、市が査定したものを議員会にかけていくという事が多かったと思うのですが、むしろ、前述のプロジェクトチームが上手く進みますと、そこで素案を作っていただくという事が一番望ましいわけです。

これは世代的にもこれから活躍される、あるいは文化芸術の中心を担う層、鑑賞もそう、参加もそうですし、そういう層の方が中心のようにお見受けいたしますし、ぜひそういう中で一つ、素案的なものを作っていただくというのも大事なんじゃないかなと思いますし、市として本気度を示すような案ができると非常に良いのではないかと思います。

組織としましては次の段階だと思いますが、素案ができまして、少し外部に目を向けた企画となりますと、やはり費用であるとか、あるいは企画自身の専門性というものも当然出てくるだろうと思いますが、これにつきましてはある程度段階を踏まえますと、今度はそれを実際に実施していく専門の部局ですね。市の内部で難しければいわゆる財団的なものですね、あるいはアーツカウンシルのような委員会みたいなものが必要になるのではないかなと思います。

次の段階だろうと思うのですが、そういうものを一つ推進機構として作りますと、非常に力強い進め方ができるようになるのではないかなと思います。

費用も伴うわけですから、財政的なことを申しますと、何か基金的なものはないのかなとか、あるいは市も積極的に進めていただいて予算立てであるとか、企業家からの社会貢献的な費用だとか、あるいはふるさと納税みたいな物だとか基金の体制、これも市の内部で専門的な方が具体的に立案をしていきますと、かなり推進できるのではないかと、いわゆる基金的な財源の実現ということもより具体的に進んでいくのではないかなという風なことを私は思います。

後は場所としましてはルミエールもあるのですが、駅前開発の拠点事業、準備中となっていますが、そういう「駅前文化複合施設」が整う時点で、こういう体制がある程度できますと、非常に全体として設立する可能性が高いんじゃないかと思います。

「駅前文化複合施設」につきましては、そんな大層な物ではなくても、図書館と何かギャラリーだとか、あるいは集会施設的な物あるいは地域振興的な施設が一体になったという、そんな大きな物じゃないですが、駅から人が自然に入ってきて見て行ったり、あるいは時間を過ごしたりする流れができる施設の様々な事例、実現例がございますが、そういうものを参考にしながら新しいことをしていく。

市内部の文化推進ワーキングチームで、情報収集、視察、それらを踏まえた議論等行っていただき、すべての作業に審議会のメンバーいろんなネットワークをお持ちの方もおられると思いますので、大いに意見交換しながら具体的な作業を進めさせていく体制ができれば非常によろしいのではないかなと思っています。

あと一つは、どうしても内部で思っておりましても、仕事が忙しいとなかなか進まないことも多いと思いますが、ある程度一定の枠組みをはめてしまうと、あるいはレールを敷くことにより、「文化芸術創造都市ネットワーク」（これは都市の規模に関わらず、その都市が何か特性を持っておりますと、それをきっかけにして文化振興を行っていくという風な、都市の繋がりということ）といったネットワークの中で交流しながら、文化芸術的まちづくりを進め、着実に推進をしていくという「文化芸術創造都市ネットワーク」への参画も視野に入れても良いのではないかなと思います。

そういう所を踏まえながら現状の課題と既存の文化振興のあり方についての見直し提言を含めて、これから一年二年という中で進めていきたいという法案なのですけども、基本的な姿勢としては、既存のものはこれで評価して、ここでは公民協働が進んでいると思うのですが、もう一つの柱として外部への発信力を高めるような文化事業を、市のワーキングチームだとか新しい世代が発想を持って提案・推進いただき、審議会委員も協力しながら新しい方向性を加えていくということで進めていけたらと。

そういう点で今回ご参加の皆さん方がそれなり、部局の枠を超えてお互い寄り合いながら、現代社会ですので多様な交流手段を活用、駆使していきながら進めて行っていただくと大変ありがたいなと思います。

以上が私の最初の話題提供ということで、後ほどこれに対することで一部出るかもしれませんが、各委員の方々のそれぞれの文化振興に関するご意見をこれからお話いただきたいと思っております。

【委員】

それでは私の方からお手元にプリントでお配りしております。スライドと中身は同じですから、こちらの方を中心にさせていただきます。

つい先ほどおっしゃられましたように、今、日本の各地域色々厳しい人口の減少ですとか少子高齢化ですね。大きな課題を抱えている訳ですけども、その中でそういった課題に対し各地で考えている訳ですが、ほぼ共通してできている答えの一つが文化芸術の創造性、これがこれからの地域を作っていく時代じゃないというのが共通した認識じゃないかなと思います。

そういう流れの中で門真市も取り組まれましたけども、まさに先ほど会長がおっしゃった一番頭の所にあるところでございまして、そういう文化芸術に対する取り組みが市民生活の質向上に貢献して、地域への定住意欲をアップさせ、また地域の新しい仕事を作って交流人口を増やして、そういうような大きな流れで大体の市町村作られています。

それで、私自身はこの３年程奈良県の斑鳩町という所でこの３月まで地方創生人材派遣という形でお手伝いをしてきました。

斑鳩町では長い歴史がありまして、それをぜひ全国の皆さん、さらには海外の皆さんに地域の魅力を知ってもらう。国からの交付金も活用し重点的に取り組んでいく。そんな

流れですね。

一つ注目すべきことは昨年 12 月に作られました国の文化経済戦略というものがありますけども、ポイントは「国・地方自治体・企業・個人が文化への戦略的投資を拡大することで文化を起点にした産業等他分野と連携した創造的活動によって新たな価値を創出し、その新たな価値が文化に再投資され持続的な発展に繋がる好循環を構築」とあります。その中で国民の一人ひとりの花開く文化環境を作っていくとともに、新しい価値を作っていって世界をリードしていくような産業を作って行こうという方向性で大きな方向付けされています。

今、国の方ではこれを基に各分野でプロジェクトを始動させて、来年くらいから本格的に始動させていこうかという流れができています。その中でこの町における文化戦略を考えていきますと、当然その中心には先ほど会長おっしゃられましたように、文化芸術活動そのものを幅広く発展させていく、そういう中心的な課題を確認しながら各政策分野、例えば教育ですとか福祉ですとか都市環境ですとか環境、経済ですとか、そういう分野にも幅広く発展させて、掛け算で新しい価値を作り出して門真の都市魅力を高めていくということが今一番大事な課題なんじゃないかなと思います。

門真市はもうご承知のように松下、パナソニックの本拠地がずっとあるわけですけども、かつて高度経済成長期の時にはまさに、文化と経済の掛け算で魅力ある新しい生活を提案しました。つまり「かまど」と「裸電球」の時代から「三種の神器」を提案して、家庭電化の時代へと、本当に国民全体がそういう方向に進んでいきたいなという方向を打ち出したことで、先進産業が世界を代表するよう育っていった。

今求められているのは「21 世紀の今日に魅力ある生活様式」はどんなものかというところを、文化芸術振興を核にしながら幅広く提案していく。こういうことが門真市として求められているのではないかなという考えであります。そういうまちづくりって当然行政だけではなくて、勿論市民も主体となりながら文化団体あるいは経済団体と幅広い団体と力を合わせて進めていくのが大事じゃないかなと思います。

で、今日は時間がございませんので、あと４つの事例を紹介させていただいて、私自身がこれは先進的な取り組みじゃないかなと思ったものをご紹介させていただいて、ご賛同いただければなと思います。

ひとつは、掛け算で言いますと「食」と「建築」と「文化」を掛け合わせた様な取り組みです。それは斑鳩町の「和 café 布穀薗（ふこくえん)」っていう事例ですが、写真がありますように明治期の非常に魅力的な古民家です。古民家といいましても法隆寺の宮大工さんが建てた古民家ですので、本格的な木造建築です。法隆寺は 1500 年続いてきているわけですが、当然何十年に１回、何百年に１回補修しないといけない。そのために宮大工の方が今の斑鳩町に千年間以上ずっと住み着いて　こられて、そこでずっと宮大工の技を伝えてきていた。その明治時代の西岡さんという宮大工の方が建てられた古民家で「旧北畠男爵邸」というんですけれども、それを今の持ち主の方が活用されて Café にされています。「竜田揚げ」とか「にゅうめん」とか地域の特産を使ったメニューを作り、そして地域

のゾーニングの中で特別用途地区を使いまして、創業しやすくしています。

次ですね。もう１つ下にあるのは、堺市にあります「利晶の杜」という歴史文化拠点ですが、これを地域の歴史的文化資源を生かしたまちづくりを進めて行くっていう場合に、それぞれの拠点の整備を神社ですとかお寺ですとか古い町並みとか、そういったものを保全するのがむしろ大事なのですが。それら全体を回遊していく。そういうようなルートづくりが大事なんじゃないかなと、今、堺市では取り組んでいます。

世界遺産に向けた保全と、かつての自治都市、堺の中心地で利休とか晶子さんの紹介を通じて歴史的な文化遺産を回遊していく拠点づくりをやっていこうかということで、ここにありますように「千利休茶の湯館」ということですよね。

「与謝野晶子記念館」は明治期の与謝野晶子が生まれた当時の和菓子屋さん。和菓子ですから当然お茶の文化と密接にかかわりまして、千利休さんのお茶の文化を受け継いで和菓子として今はもてはやされていますけども、晶子のお父さんが考案したと言われています。そういう形でお茶の文化と結びついているのですが、そういう紹介施設があります。ここの特徴は指定管理者がいるわけですけども、その運営については市民、文化団体との協働の中で取り組まれています。こちらには三千家もありますし、晶子さんについては晶子倶楽部といいまして、1,000 人近い会員の団体があります。そこが講習会とかあるいは講座とかそういったもので施設運営に参画していくということで参考になるかと思います。

それから右のページをご覧いただきますと、これは「都市環境」と文化を掛け算したらこんなイメージになるのかという例ですが、取手市というのは東京の北、利根川沿いの所で東京からずっと行きますと、利根川を渡ったすぐの所が取手市です。そこに東京藝術大学の取手校という学舎がありまして、そこのアーティスト、スタッフ、市民のネットワークでアートのある団地を作っていこうと取り組まれている事例です。ご覧いただきますとわかりますように団地ですから、何十年とかに１回外壁を塗り直さないといけないんですけれども、アーティストが入りまして、その際に少し手を加える形の作品も残しているのです。

右側の写真は団地の中での商店街ですが、これは大阪でもそうですけれども、やはり少し店舗が古びてくると空き店舗が増えてくる事例があるのですが、その中の団地の中心の商店街の一つを市と大学が連携して学生のアトリエにしています。

６つのアトリエを作ってそこで学生が作品を制作しているみたいな感じで、年一回はフェスティバルをやって、幅広くみんなに集まってもらって、という取り組みをやっています。

その下の「いこいーの＋Tappino」というものですが、これもやはり「井野団地」の中にある芸術拠点の一つで、これも空き店舗を改造した所ですが「いこいーの」というのは福祉施設なんです。厚労省の事業で高齢者見守り拠点という事業があります。その「いこいーの」と「Tappino」というのは取手アートプロジェクトの事務所兼活動拠点です。その２つを合体させて作ったものです。

ですから、普段は地域の高齢者の方々がそこに立ち寄り、楽しみながら芸術文化にも

親しんでいただいて、そういうことをやっている拠点になっています。そういう意味では芸術大学との連携ができていれば、各地域のそういう拠点を貸しながら、福祉とか教育のため業者との連携で作っていくという一つの参考事例になるのではかと思います。

それからもう一つ、「音楽」と地域づくりという点では面白い事例だと思っていますのが、大正区で音楽のあるまちづくりというのが大正区の基本方針として掲げられているのですが、そこは沖縄からお越しになった市民の方々が人口の４分の１くらいおられる。沖縄の音楽文化、そこにエイサー祭りの写真が載っていますが、８月の盆の時にご先祖様を送るエイサー祭りが毎年行われています。

それともう一つ、あまり知られていなかったのですが、第一次世界大戦時にドイツ兵の捕虜が日本に何千人もやってきて、その最初の収容所が大正区でした。その後、徳島県の方に移られるのですが、今年がちょうど 100 年になりますが、日本でベートーベンの「第九」を演奏したのが最初は徳島県で、大正区ではその歴史をふまえて区民の第九というのをされています。

それともう一つは右側のポスターになっていますが「T-1 ライブグランプリ」をやっていまして、若手音楽アーティストの支援事業で「T」は大正区の「T」ですけれども、ファイナルで６組残っていまして、区民の皆さん手作りで地域の FM テレビ放送とか連携しながら、次の時代の若手アーティストを育てていこうという取り組みをされています。

最後に、鯖江市という所が日本の眼鏡産業の中心で８割９割作っているそうですけども、残念ながら中国や非常にファッショナブルなヨーロッパとかの競合があります。

それを何とか打破しようということで、眼鏡作り、チタンフレームが主流ですけども、微細な金属加工技術の技と、隣にあります金沢美術工芸大学の技、もう一つは大阪大学のレーザー加工技術の技、新技術とアートと伝統的な技を掛け合わせる中で新しい眼鏡の歴史を作っていく、眼鏡産業の道を作っていこうと。

今一番踏み出しかけているのは医療機器ですね。作りながら新しい分野を開拓していこうとしています。

こういうかたちでそれぞれ各地域が個性ある文化資産を生かしながら一生懸命取り組まれていまして、先ほど会長がおっしゃられましたようなユネスコの創造都市ネットワークというのはまさに、大きな取り組みの一つです。わが国では最初はユネスコへの登録をめざした横浜とか金沢からスタートしたのですが、今は 100 くらいの市町村が参加された都市ネットワークになっていまして、個々の取り組みを勉強していくのは参考になるのではないかなと思います。

そういう中で最後に載っております絵は参考になればと思い載せていただいたんですが、地域を活性化していく上でそれぞれの地域の特徴、個性を生かした仕事を起こして定住人口と交流人口を増やしていこうということで仕事を起こしたい方の支援センターを作って、新しい仕事をやっていこうという方々を地域の様々な資源と繋げて、支援は様々ですがニーズと資源をマッチングさせる仕組みを作ってやっていこうということです。こういう

一つの取り組みの仕方も参考になるなということで載せさせていただきました。以上です。

【会長】
ありがとうございました。ご質問あろうかと思いますが後で集約してという風なことですので、連続してお願いしたいと思います。

【委員】
よろしくお願いいたします。今日何を求められているのか若干わからない部分はあったのですが、文化行政あるいは文化振興というものが何を意味するのかを少し大説的に、私は何をやっているのかとか、世界あるいは歴史的な部分を含めてどういう風にまちづくり、都市づくりに生かせるかという話をさせていただければと思っております。
今回タイトルといたしましては「アートによりひとづくりまちづくり」という風に考えさせていただきました。内容に関してはウェブとかいろんな所に載っているものを解説しておりますのでご理解いただければと思います。
そもそもどうやって芸術文化が行政スタッフまで入り込み、実践されているかという時代的背景のお話をしていきたいと思いますが、この社会的経済還元構図が変わってきた。それによって様々な課題が出てきた。変動の問題だったり、一番大きいのは産業エリアにおいてどうやって活用するかということが含まれております。あるいは医療福祉の問題とか人口減少とかを、どうやっていくかということがあると思います。それにおいて芸術とかデザインの創造力による再生プロジェクトというものが芸術文化振興の多様化に伴って解決策として用いられるようになったとあります。
海外で芸術作品の国際展というものが世界地図に分布されるくらいたくさんありまして、アジア、ヨーロッパ、中東、中南米、アフリカ、オセアニアから始まりまして、様々な国と地域でいろいろなプロジェクトが行われているということが見て取れるかと思います。
その中でも海外の国際展のお名前をよく聞かれるかと思いますけれども、その最初に行われたものの事例といたしまして「ヴェネツィア・ビエンナーレ」と言われています。これも 19 世紀の末、100 年以上経っている国際展ですが、イタリア統一によって地盤沈下した、ミラノにとって代わられたイタリアのヴェネツィア市の市議会が発案して、もう少しこのヴェネツィアを活性化させようじゃないかということで、芸術文化を中心とした万国博覧会をモデルにした事業の拡大を掲げまして、芸術による発信をしようということが始まりました。今やこれが各国のパビリオンということで、国がいろいろと文化芸術のオリンピックと言われるかたちで２年に１回行われています。
こういった所をさわりにしながら、もう一つ、先ほど戦後復興ということを申し上げましたけども、これはフランスの「アヴィニョン」という演劇祭です。これは第二次世界大戦後に芸術家がここを聖地にしようじゃないかと、人々の心のケアをしようじゃないかという事で、これは毎年、何万人という方々が動員される演劇祭として町なかで展開されています。これはいろんなジャンルがございまして、町なかが全部芸術で埋まるというようなかたちで展開されているそうです。
もう一つ、スコットランドの「エディンバラ」の方でも復興ということで、芸術祭を

町なかで溢れてくるような、町なかでいかに芸術祭を展開するかというような事例だと思います。

これはドイツですけども、ナチス・ドイツ、皆さんご存じかと思いますが一時的に「退廃芸術」といって、革変自体を全部消去しようみたいな動きがあったそうです。これを市民の手で守る、あるいはそれによって退廃芸術 20 世紀の芸術をもう一度守ろうということで、ドイツの「カッセル」という田舎町の方ですけども、５年に１回、これかなりテーマをきっちりとした形で見本市という風に、ヴェネツィアの「ビエンナーレ」というのは国の見本市ということで、政治が関わるようなある種芸術祭になっているんですけども、それに対してこの「カッセル」はもう少し人間性の回復だったり、社会的な課題になっているようなものを芸術祭で発信していこうということで、「ドクメンタ」という形で町なかで市民の人たちも認識されているくらい、世界各国から集まる事業として発展しています。

同じくドイツですけども、ドイツの町中の屋外彫刻展として、先ほどは５年に１回展覧会というかたちですが、この「ミュンスター彫刻プロジェクト」というのは、10 年に１回行われる展覧会として様々な屋外彫刻が１点１点その度毎に町の中に置かれていく、すごく長いスパンでやっておられる展覧会プロジェクトになっています。

実はある彫刻家が市に彫刻を寄付しますよとすると、「それはどういうことだ」「そんな物は私達は要らない」と市民からの議論が巻き起こりまして、その後芸術を受け入れるまちとはどういう意味があるのかということで、実験ということで 10 年に１回行われているというものです。

もう１点、これはもう少し方向性は変わっていますけども、オーストリアの「リンツ」という小規模の市が始めたんですけども、町なかで芸術と化学の横断的な領域をということで、先ほどの大阪大学の話もしていただきましたけれど、技術と表現を産業に繋げるということで、これは研究所を町なかに作りまして、オーストリアの中で世界各国から科学者とアーティストがどういうことが行われるのかということで、「アルス・エレクトロニカ」というフェスティバルが行われております。

今まで見せたのは世界各国で行われている芸術祭ですね。芸術祭以外にどういうものがあるかといいますと、使われていない土地を再生しようというプロジェクトが　世界各国で行われております。これイギリスの北東部の「ニューキャッスル」と「ゲーツヘッド」の２つのタイン川を挟む都市なんですけれども、そこも元々産業技術で発展してきたのですが、産業の形態が変わりまして衰退し、まちの経済もどんどん沈下していったわけです。そういった中でシンボルとして「アントニー・ゴームリー」さんというとても著名な芸術家ですが、この右上にあるすごく巨大な彫刻「エンジェル・オブ・ザ・ノース」を、まず鉄のまちだったということで、シンボルを作りましょうということで、その周辺が工場の跡地とかをアーティストが移り住んで様々な劇場や、アーティストによるアトリエみたいなかたちで復興しようということで、20 の文化施設がこの彫刻から始まって、世界から集まってくるような展開になっています。これはアートの現用ということで、リノベーションという形になると思うんですけども工場の跡地そのものを公園に見立てようといった

動きもあります。

これはドイツにある川の流域にある鉄工所、様々な工場跡地が一連にある地域らしいんですけど、跡地そのものをモニュメント、日本でいう所の川崎の工場地帯みたいな感じかもしれませんが、こういった産業遺産そのものを芸術的なあるいは巨大なオブジェクトとして見立てて、この環境でパフォーマンスをしたり公演をしたりとか、別にアーティストが作品を作らなくともこの工業自体を言わば文化的な資産として見立てようという風な動きがあるようです。

同じようにフランスの造船業が栄えた所らしいんですけども、発見後に市民の文化事業の柱として当時の市長が提案いたしまして、市民とか専門家がどうやってこの事業を、市を活性化させるかといったときに、町全体を大きなオブジェクトを作り、サーカスみたいな風に見立てまして、町中全体をサーカスの会場になるような事業を展開して、いろんな所をアーティストホテル等にして約 30 か所が文化施設に、アートの軸によって再生したという形になっているそうですね。

あるときに今まで見向きもされていなかったこの地方都市が、世界で最も住みたい町ランキングに入ったそうです。ある種独断的に始まった市長による英断ですけども、それが今や世界からいろんな人たちが訪れる文化資産になったという結果になっているということで。今駆け足で欧米を中心とした事例をお伝えしましたが、特に中国とかでも産業跡の倉庫をアーティストとか文化施設に変えた様々なそういう事例があります。

では日本ではどんな事が行われたかというと、昨今 47 都道府県、どこの都市でもある種芸術祭が行われているといっても過言ではないくらい、1990 年以降、特に 2000 年になってからかなりの数の芸術祭が行われております。それはどういう内容かというと「越後妻有アートトリエンナーレ」「瀬戸内国際芸術祭」あるいはそれらを束ねる全国の「アート NPO」というものも昨今では盛んに行われまして、市民活動推進しながらネットワークしていくというような動きもあったりします。

地方振興あるいはまちづくり観光産業としての、国際展フェスティバルというものは特に 2000 年以降盛んに行われております。これはどちらかというと地方振興のプロジェクトなんですけども、都市魅力創造ということで、オリンピック誘致を日本がしますけども、実はそれに至るまでに様々な文化政策というものが行われ、都市部での芸術祭、アートフェスティバルというのは、文化スポーツというのは両輪になっていると言われておりまして、オリンピックの評価の中でその予算の中の何%がアートに投下しているか、というのもある種の基準になると言われているという事もあるらしく、それを見越した東京都がかなり数年前から様々なフェスティバルを立ち上げたという事例もあります。あるいは京都だとか様々な都心部の中でもいわゆる横浜ですね。横浜は割と創造都市、クリエイティブアイランドとして「横浜トリエンナーレ」という先ほどの「ヴェネツィア・ビエンナーレ」が有するような国際展を日本で初めて本格的に展開したと言われています。

このように都市の魅力創造のためにかなり文化、いわゆるデザイン等がかなり実践され

ているかご理解いただければなと思います。芸術祭の中でも皆さんご存じかもしれませんが、地方都市の中でその集落の人がいなくなくなった町なかで、里山というとても日本的な芸術祭といわれていますけども、棚田の後継者不足、あるいは少子高齢化によって限界集落となってしまった所をアートの力で活性化するということで、いろんな場所をアートの作品で展開するということ、これによって雇用が生まれる、それによって運営する人々が動いて産業に繋がっていくようです。

先ほどの「クリエイティブシティ・ヨコハマ」として掲げまして、海から眺める景色として大桟橋を作ったりとかかなり大掛かりな、超規模な文化政策としてやっている地域連携のアートプロジェクトということで、高架下の使えなくなった場所をバザールとして使ったり、アトリエにしたり、様々な港町の移行を活用したプロジェクトが行われております。

もう１点四国の「瀬戸内国際芸術祭」皆さん聞いたことがあるかもしれませんが、これも産業遺産で、使いにくくなった工業跡地を美術館として復興するということで、瀬戸内国際芸術祭というものに展開していることになっています。これは「ベネッセハウス」、企業が個人資産を言わば投げ打ってというか、文化都市として文化政策のまちとしてどうやって生きていくかってことを「福武書店」の福武さんが個人資産を投資しながら美術館に変えたりとか、様々なことをやってきたことを起点にして、今度は香川県が乗っかってきたりとか、あるいは高松市が文化行政をともにやりましょうということで、2010 年から本格的な芸術祭が始まるというような。

その他にも例えば別府プロジェクト。皆さん昔の新婚旅行で別府に行くことがすごく繁栄していた　時代があったそうですけども、その温泉街が沈んでいたときに３年に１回 NPO が主導で、　　先ほど申し上げたのはかなり大きな主導が動いているんですけども、これは民間の NPO が主導となってシャッター街を自分たちの手で何かプラットフォーム化できないかなということで、手作りで学生の人たちもいたような状態だったんですけども、そこから今発展して国東半島とか「大分県民芸術文化祭」だけでなく、地産地消、例えば地元で採れた農作物を商品に変えたりとか、そういう風な活動まで、今は繋がっているようです。環境産業あるいはアートツーリズムということに芸術文化が兼用されているという風な事例としてご理解いただければなと思います。

この様にたくさんのプロジェクトあるいは芸術祭というものが世界各国あるいは日本各地で行われています。それはどういう風な、私の仕事の説明は飛ばしまして、なぜそういったことが行われるかを考えましたところ、やはり先ほど委員がおっしゃられたように、芸術の拡張機能と都市魅力創造が極めて人の感性などに、いわば寄与するためにはどういう風なことが必要かといいますと、価値観の発信、プロデュース能力あるいはディレクション、繋がりの革新性をオーガナイズ、組織の革新性のような様々な革新性がもたらされるということで、これにはまず行政だけじゃなくて大学、企業、NPO、アーティスト、個人、地域、様々な人たちが繋がるような事業の仕組みづくりが必要です。先ほど委員長がおっしゃられたことですけれども、そういう作業とか人がとても重要だという事が言えるので

はないかなという風に考えております。

また、芸術の拡張機能とか文化創造がなんであるか、アウトというよりは１つの答えがないからわかりにくい、年代順に何考えているかわかりにくいと言われますけども、逆に言えばわかりにくかったことほど人によって価値観が違う、ある種の新規性、複眼性、多目的性の活用が芸術文化には必要であり、それがこういった様々な世界各国の中で重用される所以になっているのかなと。

もう１点はアーティストの公表性と職の社会化ということを話そうと思います。アーティストというのは個人利益として動いてらっしゃるという考えかもしれませんが、１人でお金にならない、あるいはどうなるか分からない、人生を賭けた博打のようなものをある種やっているんですけども、１人のアーティストが社会を広げていく、実はとても公共性の高い存在だという風に私は考えておりまして、さらにいろんな既成概念を飛び越えるような発想能力、執行力が、アーティストの職のそれが、段々と社会化していっているというのはこういった事例に基づく根拠なのかなという風に思っております。あるいは主題の多様化、例えば医療福祉だとか、現実的な問題ではなかなか解決できないようなことを芸術によって、間接的にここに問題があって、解決しないかもしれないけれど課題があるということをちゃんと見えるようにすることも芸術の力なのかなという風に思います。

あるいは「規制緩和の突破力あるいは特権性と構想性」と書いていますけども、先ほどお見せした芸術祭の中で常設的に展示するのは難しいんですけども、仮設展示するということによって、建築基準法で守られて設置できない部分があったりするのですが、それを仮設という理由において実験的にやっている、期間限定でいいからやってみましょうということで、仮設的に条件を突破できるというような事例もたくさんあったりします。

あるいは「いいね」などの承認欲求みたいな事が皆さんの中で散々行われていると思いますけれども、その「いいね」というものはどういう根拠なのか、あるいは何をもって基準とするのかということが、物事っていうのはそんなにすぐわからない、はっきり言って人が何を考えているのかもわからないし、まず、すぐレスポンスを返さなくちゃ、でももっともっと長い時間、文化というものは耕す、そもそもカルチャーの語源が農業に由来されていることを考えていただければわかると思いますが、わからないことを含めてそれを考えていく術というものが人間だからこそ許されているところがあって、明白されたわかりやすさの危うさに警鐘を鳴らすということも、芸術のとても重要な役割としてあるのではないかなという風に考えています。

物事の見方とか捉え方、既存あるいは既知の事を価値変換させる能力が芸術文化にはあり、おそらく先ほどザッと申し上げたような世界あるいは国内外の事例がたくさんあるのかなという風に考えております。芸術の物事を超えていく力により、人間性の回復と創造力の情勢ということが、結果、まちを変えるのではなくて、まずは人を変える、人づくりからまちづくりへということで、おそらく芸術文化の拡張機能、あるいは都市魅力創造に繋がっているという風なことで考えています。そういったことを投げかけながら次回の議論に持ち越したいと思います。以上です、ありがとうございました。

【会長】
ありがとうございました。それでは引き続いて、おねがいします。

【委員】
よろしくお願いします。今、御三方が非常に大きな目で物事を捉えてお話されました。私は小さい目でしか話をできないですけど、私の立ち位置を説明させていただくと、実は元々はオーケストラの人間なのですが、私の大学時代に日本のオーケスト界に大問題が起こりました。それは当時の「日本フィルハーモニー交響楽団」が、スポンサーからある日突然、専属契約打ち切りを通告されるということになりまして大騒動になったことがあるんです。そしたら当時の小澤征爾さんが天皇陛下に直訴するということで、新聞に大きく載ったりして。それは私の学生時代だったんですけども、それをきっかけに「日本フィルハーモニー交響楽団」という所は市民のためのオーケストラということで、日本全国市民とともにいろんな活動をしていって現在に至るわけですけども、オーケストラというのはあんまり世の中から求められてないので、しょうがないなということなんですね。「好きなことしてお金貰うんやからよろしいやん」みたいな、そんなところもないではなかったんですけども、今は大阪でも「大阪のオーケストラ４つを統合したらいい、　　４つもいらん」みたいな話が出てですね、それで必死に議論になったりして。オーケストラやっている人間からするとオーケストラってそんなにいらんものかなと、オーケストラ側からするとオーケストラって素晴らしいってことをわかってもらおうと、ものすごく努力をしている訳なんですけども、そういうところで苦労してきたというのが私の中でひとつあります。
それからこの京阪沿線の他市で文化振興にずっと関わらせていただいて、地域と文化を相変わらず考えておりまして、それからこの近隣の市で指定管理の選定にも関わらせていただき、その辺りの問題も色々感じているので。そして今教育の現場にいるとこういう複雑な立ち回りでお話をさせていただきたいと思っているんですけど、それにしてもですね、このような会議を持ってくるのはすごいことやと私は感心しております。なかなか他では考えられない。市の職員の方が沢たくさん来られて、市長までいらっしゃるなんてこんなことはないですね。これは市の取り組みの姿勢を動かされて会長の力はすごいなと思っております。

で、私の本論に入っていきますけれども、この京阪電車が走っている市で門真と守口にはない、他の市にはみんなあるのにないものがあるんですけど、何だと思います？京都までみんなあるんですよ。それは市民オーケストラなんですよ。大阪府内のおそらく 40 近くの市民オーケストラがあると思うんですけど、大学のオーケストラとなるともっと増えると思うんですけれども、この門真にオーケストラができたことは多分一度もないんですね。で、東大阪市にも実はオーケストラはないんですけども、この間、東大阪新しい市民会館ができて「関西フィルハーモニー管弦楽団」とフランチャイズ的な関係を持とうというような考えもあったりして、違った意味で一歩進んでいるんです。で、オーケストラがあった方が良いと思うんですけど、作ってほしいという話を今からするんですけど、

オーケストラというのは音楽の中核なんですよね。オーケストラがあれば合唱と一緒に演奏できるし、それから市内にピアノの人がいればピアノ協奏曲が作れるし、トランペット吹いている人がいればトランペット協奏曲もできるし、もちろんバレエもオペラもできるんですね。そういう音楽の中核なんですよ。ものすごく幅広いものを持った芸術の形態なんですね。

寝屋川市の例を申し上げますと、寝屋川もオーケストラがなかったんですけど「寝屋川音楽祭」というのをやりまして、その時に第九をやろうと市民参加のオーケストラを作ろうということで始まったんですね。そこから「寝屋川市民管弦楽団」と言いまして、現在に至るわけですけども、そういった行事を通じて毎年４月に市民でつくるオーケストラというものをやっているうちにオーケストラができちゃったと。そして音楽祭の最後に実は一昨年に終わっちゃったんですけども、オペラをやったんですね。プロの方を招いて「蝶々夫人」をやったんですね。字幕がちゃんとついて演技もついて、なかなか本格的なオペラができたんです。ところがその音楽祭は去年からなくなっちゃったんです。どうしてかというと駅前に「アルカスホール」っていう 300 くらいの新しい小さなホールができたんです。それで市民会館は古くなっちゃったんですけど、駅前を活性化するために 300 の「アルカスホール」で市民音楽祭を別の形でやりますということになったんです。それはそれで、ものすごく新しいアイデアで、寝屋川駅からアルカスホール、市民会館までの地域を一斉に文化の催しにしちゃう。文化祭、非常に面白い組み合わせをやられているんですけども、ただ残念なのが、観客が少なくなったのでこれはあかんという話なんですね。僕としては寝屋川で字幕付きのオペラができるようになったという点を評価しないのかなと、これは定量的に評価しちゃったんですね。定性的な評価をしなかったんですね。それを僕は市に対して声を大にしてちゃんと評価しないといけないという風に言ったんですけど、これはちょっと愚痴なのですみません。そういうことで寝屋川にはオーケストラがあるんですね。

オーケストラがあるといろんな人が集まっています。大体 50～70 人くらいですけど、いろんな市から毎度大阪市内のオーケストラ中心に行きますけど、いろんな人、いろんな仕事している人が集まって非常に面白い。１つの町みたいになる団体です。そのオーケストラがいろんなことができると言いましたけども、例えば施設や学校で鑑賞会ができると思うんです。幼稚園から 80、90 くらいの人まで様々の形態でコンサートすることが多いんですけども、喜び方がすごいんですよね。そんなとこがオーケストラはできると思うんですね。

オーケストラをやる上での難しさっていうのは、実は練習場なんですね。オーケストラはものすごく大きな楽器がいっぱいいるんです。それを置いておく場所がない。それと練習場ですよね、譜面台も置いとかないといけないですし場所がいるんですね。幸いルミエールホールは門真市吹奏楽団の方に楽器を置く場所を提供されている、これは立派だなと思いますね。寝屋川市も実はしてくれているんです。楽器も買ってくれているんですけどそういう補助をすると、すぐにオーケストラは集まります。ルミエールで練習したら楽器置かしてくれるし、場所を貸してくれる。寝屋川の場合は市民会館の練習室を優先的

に取ってくれる。定期的に間違いなく練習できるんですけど、町の市民オーケストラというのは、来週はここ、再来週はあっち、あっちこっちで練習ということで。

私は伊丹市に習って作ったらどうかと思いますね。「伊丹シティフィルハーモニー管弦楽団」というのがありますが、これは市の財団がオーケストラの世話をしているわけですけども、指導者にプロの方を呼んで、主な団員も音大出身の方がいて、発表まではいかないですけどレベルのオーケストラを作っていける。そして、レベルの高い人がやっているからアマチュアの方でもレベルの高い人が来るんですね。伊丹ではオペラも定期的にやっています。特に管楽器の音大生は吹く場所が欲しくてしょうがない人がいくらでもいます。市が少し補助してあげて、市立の半プロオーケストラを作っていくと。そうすると最初に会長のおっしゃられた市外へのアピールということで、伊丹市はすごいオーケストラをやっているというのはみんな知っていますからね。まさか門真にってなると思うんですよ。門真にそんなオーケストラができたんだということで。写真にもありますように第九もエレクトーンではなくオーケストラでやられた方がずっといいと思いますよ。私も色んな所で市民第九やっていますけど、やっぱりオーケストラでやると感動の具合が違う。指導者も素晴らしいと聞いています。参加者の方々も本当に楽しいとおっしゃっているんですね。もったいない。その感動を倍増してあげないとだめです。寝屋川市が気にしているのは「何で「寝屋川市民管弦楽団」だけ援助するんや」と、他の文化団体がなんでやねんって話なんですけど、市の方は色んな貢献をしてもらっているからそれでいいんですと小声で言うんですけど、そうじゃなくて市の方針として「わがまちは音楽のまちです。オーケストラのまちです」と言って、方針としてバーンと出したらいいんですよ。そしたらそれに引き続いて合唱団だとか盛んになってくるんじゃないかなと私は思いますね。

そうすると市内からも市外からも評価されるような市になるんじゃないかなと思います。ただしそれについてはしっかり評価がいりますよね。ちゃんとした高いレベルを保っているのは勿論ですけど、市の方できちっとやっていただかないと。

次に指定管理の問題なんですけども、このルミエールホールの指定管理業者は非常によくやられていると思います。細かい視点で様々なことをやられているので僕も何か文句をつけなあかんなと見たんですけども、やるべきことはみんなやっているなという感じでなかなかいいなと思うんですよ。ただですね、私個人の感想として、もう少し芸術的観点のレベルを上げられないかなと思うんですね。それは多分予算の問題なんですけよね。今度枚方にホールができますが、芸術監督を置きました。そこまででなくてもいいんですけど、市の方で非常勤の芸術監督を選ばれて、ルミエールホールの、それこそ催しのレベルだとか発信の仕方だとかして、指定管理業者だとなかなか連携できないでしょうから、その方がよその市と連携して共通の物をやるとかそういうことができる権限を持った監督を置くとか。国の方だと音楽監督を持っている所は 10%にも満たないそうで、そういう役割を与えてあげたらどうかという風に思いますね。それから市の文化会館・市民プラザの指定管理とルミエールは違いますよね。これは多分理由があるんだと思いますけど、生涯教育との違いがあると思うんですけど、それは一体化できないのかなという風には思いますね。それぞれが小さいのをやっていて、なんかもったいない気がしています。

そんなことを考えると、もっと言っちゃえば市の財団を復活したらどうか。市が財団を持つべきではないのかなと。わかるんですけどね、最初はお金がかかるかもしれんなぁから始まって、意外に掛かるなぁとか、そのうちもうちょっとなんとかならへんのかなぁって、そのうちもう止めとこうやというパターンになるんですけど、ここで市の財団というのをもうちょっと考えられたらどうかと思います。先ほど定量的、定性的というお話しましたけど、人気があるから、お客さんがたくさん入ったから素晴らしいというものでもないですから、指定管理業者を許可するときに、どうもそちらの方で何人入りましたらみたいなことがありますけども、やはり芸術ってそういうものでないところがあるんで、そこの評価の方法も考えていかなという風に思っています。退屈でないものはすぐ飽きるという言葉があるじゃないですか。で、飽きないものは退屈であるというところがあるんですけど、やはり良いものは一見退屈だなぁと。ただわかってしまうと、この退屈なものが退屈でなくなるという、その素晴らしさが芸術にはあると思うし、せっかく今何かもう１個できそうな感じもありますし。

ルミエールホールっていうのはこの辺、寝屋川でオーケストラをやっている人間からすれば、あんなホールが寝屋川にあれば、ずっと守口市民も思っていますよ、ルミエールホールが守口にあればと。そういうのをせっかくお持ちなんですから、本当に市職員さんのリーダーシップでホールが創造の場として活性化することを期待しています。以上です。

【会長】

ありがとうございました。少し早めにスケジュールが動いていますけども、各委員の方々からは、各地にある文化的な資産というものの違う面からの見方、あるいは再利用の事例だとかそういうことが大切だという事をお話しいただいたんですけども、具体的な見方だったりとか、事例を、文化を中心に出していただいたりということで参考になったのではないかなと思います。

それから、アートそのものの力ですね。これは私も教養だとか　　鑑賞するものという捉え方をしておりますが、実は裏にもっと深い意味がアートにはあると。そういうのが最近特にわかってきて、各地でそういうのを生かしたような企画のある催しができているという事で、それが一つの社会的なパワーになっているという風な現在の情勢と言いますか、トレンドを見させていただいたということで。

それから、オーケストラも含めまして印象深かったです。いわゆる文化行政のリーダーシップであるこれを発表していただいた中で、そういう文化事情、オーケストラも一つの事例だと思いますが、しっかりした形で根付かせていくことの大切さ、それと評価ですね。対効果という事で見がちですけれども、それだけではないもう少し高所からの判断も必要だろうという事で、芸術観点からのご提案でいいと思いますし、財団そのものが要るのかということは別にいたしまして、何か財政的な補助の基盤、これが何か生まれてくれば非常に良いのではないかなと考えさせていただきました。

少し時間ございますけれども、これから質疑応答ということで移ってまいりたいと思い

ますが、進行してもよろしいでしょうか。こんな話でよろしいでしょうか。いいですか。それじゃあせっかくいろんな先生方おられますし、気になられたこと、感想でも結構ですし、質問でも結構ですし、どなたかおられますか。どうぞ。

【市職員】

お話ありがとうございました。本田先生のお話の中で文化資産を生かしたまちづくりということで、いろいろ食と建築であったり、歴史文化いろんな種類をご紹介いただいたと思うんですけども、全国的に見てどの分野が一番入りやすいのかなと思いまして、それが一つと、門真市文化の施設がたくさんあり、いろいろ　市民が活動されているんですけども、もし門真の中でこういった種類の活動で、どの活動が一番あたりやすいのか先生はどうお考えかなと思いまして、その２点教えていただければと思います。

【委員】

非常に大事なご質問ありがとうございます。１つ目ですが、全国的に見ていただくように１番いいのは内閣府のホームページに地方創生のホームページがあります。そこで、1,800 の地方創生事情が全部載っていますので大変な仕事になりますけれども、そこの何町は何をやっているのかというのが全部わかります。ごくごく一般論的に言いましたら、やっぱり１番多いのは歴史的な文化資源で、どこの市町村にでも何かあってそれを生かして芸術力を高めようと、あるいは交流人口を、よそから人を呼び込もうという事になりますと、例えばオーケストラはどこの市町村でもないですし、どうしても小さい所になっていきますと、自然資源歴史資源は何かしらありますので、それを何とか生かそうという試みが一番多いですね。文化財保護法ですが、先ほどの文化経済戦略の策定と絡んで、やはりこれも大改正がありまして、文化財を守ろうと、後世に伝えようという事で保存というのが一番に置かれていたんですが、今は活用というのも大事だと。今ある文化的価値をできるだけ多くの人に見てもらって、それを中心として所有ができたらという考えに転換しつつあるんですね。その中で視点発想ですね。門真ではそれが大阪唯一の首相が生まれたとかですね。歴史的なそういう資源はあると思いますので、やはり古い所が残っている所がありますから、そういう所を再発見していけばいいのではないかと思います。

門真でどういう資源を生かせるかというのはそれこそ皆さん方のお仕事だと思います。一番地域についてご存じなのでそれぞれの目でそれぞれの中でこういう所は生かせるんじゃないかっていう形で発見していただいて、それを活用するためにどうゆう地域の人達と一緒になって協働する組み合わせという形を考えるのが大事なんじゃないかなと思います。

【会長】

よろしいでしょうか。

【市職員】

はい。

【会長】
他はいかがでしょうか。どうぞ。

【市職員】
先生の話の中で、守口の方も、寝屋川の方も、ルミエールホールが欲しいと思っていますよという話がすごく面白くて、昔からここにずっとあるんですけども、門真にずっと住んでいると例えばルミエールホールは当たり前にあって、その凄さが気付けていない所が自分自身ありました。３人の委員からそれぞれ見られて、門真のどんな所にポテンシャルがあるかというような所があれば、それぞれに教えていただきたいのですがよろしいでしょうか。

【会長】
私、今日はご意見を聞かせていただこうかと思ったんですけれども、基本的によく並べておりますのでそういう所で言いますと、いろんな役割、いいことがあると思うんですね。で、資源というかそういう活動できるというもの「地の利」だと思うんですね。便利だということで大阪沿線でも割と沿線でのネットワークの中でも割と真ん中にある気がしますし、それからモノレールも繋がりがと考えておりますので、基本的には門真そのものというよりも京阪沿線の北河内エリアの真ん中での門真という捉え方も大事ではないかなと。そうしますと他市との連携などもスムーズにいくかと思います。今もちろん都市の活性化の中で門真にはないですけど、寝屋川の大学だとか、ああいうものをもっと自由にやっていったら良いのではないかなと。そういった点で言いますと、モノレールなど越えますと、大阪大学であるとか、より広い範囲のいろんな協力できるような人を一緒に進めてくという、そういうような地の利の良さがいえるのではないのかと。
歴史的な遺産というのはやや考えてくるようなところがあります。それから従来言われております、いろいろ産物であるとか、これも地元の特色ではあるのですが、今後の活性化の中ではそんなにプラスになってくるものではないかなと思いますね。ですからやはりこの時勢の中で言いますと、新しい地元での動きを捉えながらやっていくことも大事じゃないかなと。ですから前方的に発信性のあるような事業とのコラボレーション、協調それも大切だと思いますし、他のブランドをうまく使いながらやっていくというのが効果的じゃないかなと。以上です。

【委員】
先ほどオーケストラというご提案があって、すごく共感する部分もあったのですが、門真の場合はパナソニックに吹奏楽団がありまして、第九コンサートでも共演されています。２回目からはピアノとエレクトーンとティンパニと打楽器ということで、エレクトーンも最近すごい、電子楽器がプロレベルになっていますので、第九とかほとんど音も遜色なかったなと。今、地域でも市民第九ってたくさんやっていると思うんですけども、こう

いう形の所は他にもあります。オーケストラとやっていますのは大阪狭山市というのがありまして、そこは大阪教育大学とやっています。

やはり門真で一番大きなストックというのはやはり「ものづくりのまち」ですね。パナソニックに代表されて、かつて非常に裾の広い地域産業の蓄積があったのが数は減ってきていますけど、優れた技を持っておられるというのがまた、結構頑張っておられるのではないかなと思いますので、先ほど申し上げたような文化経済戦略が上手く回りだしているようなプロジェクトができればおもしろいと思います。

次も来年度に向けて予算要求をしていると聞きました、できるものがあればそれを活用して、何か門真なりの特色を出していけたらいいのではないかと思います。以上です。

【委員】

もうかなり言っていただいて、それ以上のことがあるのかと、私は逆に教えていただきたいんですけど、別の市の中で、庁内でそれぞれの課題があって、見えているものが違うと思うんですけど、逆に私たちがどう見えるかではなくて、皆さんが行政のプロであられる中でどういった魅力があるのか、地域の魅力の掘り起こしのワークショップみたいなのを別の市でやったことがあるんです。意外と自分たちで整理したことがない。とすれば逆にまずは門真の魅力とは、あるいはマイナス面は何なのか、実はマイナス面にこそ次のチャンスがある可能性もあって、そこが課題になるわけですから、プラス面とマイナス面みたいなことを何があるのかという庁内連携の意見交換等とかをしてもらう、だから私たちがこうですっていうのは多分一遍通りのことしか出ないと思います。ではなく、皆さんが携わっている中で何が魅力であり、何が課題であるかということを実は庁内連携の中で話し合う場を設けられたらもっといい、私たちがああだこうだ言うよりも良い回答が出るんじゃないかという風に思います。だから私がどうこうというよりも、そういうやり方っていうのをもし可能であればやっていかれたらどうかと。

実は別都市でそれをやったときに、それぞれのワークショップでこういう魅力ありますってことと、市民アンケートのズレっていうのが見えてきたりするんですよね。市民にとって思っている魅力と行政の方が思っている魅力のズレだったりとか、それをまず認識してみるっていうこともありかもしれませんし、まずご自身達の中で門真って何なのということを掘り下げていくことが一つの案としてあるのではないかなと思います。

【委員】

よくこういうことを聞きますよね。地方に行くときは、私らの町は何にもない田舎なんでといって、いや何にもないことはない、何にもないのが良いんだという話を聞くじゃないですか。やはり今は先生がおっしゃったように、まず地元の職員の方々がそれを見つけるのが大切なんじゃないかなと思いますし、僕自身は率直に言ってこのような集まりができるということが門真市の凄さではないかなと思いますので、これが今この時間が門真市の凄さではないかなと思います。

先ほど第九の話出たので、音楽専門なので口を挟みたくなってしまうんですけどね、

オーケストラってやっぱり吹奏楽とは全然違うんですね。パナソニック吹奏楽団もすごいんですけど、その凄さとはまた違うんです。オーケストラでやられたこともありましたね。１回、弱点がありまして、プロの場合、地方の第九っていっぱいあってオーケストラ呼ばれていくんですけど、ダメなんですね。地域の合唱団の方は地域の思い入れがすごくあって、この地域で第九をずっとやられたんですよね。僕らは仕事なんですけど、なんか明日姫路か、早く終らへんかな、みたいになってしまうんですよ。ただ、演奏は真剣にやりますよ。やるけども仕事でそのできたもの、カルチャー、耕すことですから、耕すのは地元の土地でないと、レンコンはやっぱ門真やみたいな、地元の土が出したんで、やっぱり地元の土から耕していかないとダメなんで。特にアマチュアオーケストラ、実は伊勢で十何年か第九を「大阪市民管弦楽団」を連れて行っているんですけど、やっぱり地元の人の意識とオーケストラの意識はアマチュアやから全然違うんですよね。オーケストラの人達の気持ちを地元の人たちの気持ちに近づけなあかんと思って本当に努力していたんですけど、そういう意味でそこもどうかなって。やっぱりオーケストラで地元の方がやるというのが一番素晴らしいと思うし、それとやっぱり全楽章やらないとだめです。感動が何十倍違います。一楽章の最初の音があって、第九の喜びの歌があって初めて感動するように作ってあるんですから。だからそれをめざしてぜひやっていただけたら。

【会長】
　ありがとうございました。そしたら、次に何かあれば。

【市職員】
　職員皆で第九の掘り起こしができたらおもしろいかなと思いました。

【委員】
　言うのを忘れていました。この演奏会が大体すごいんですよね。第九実行委員会も門真の魅力ですよね。

【会長】
まだお時間ありますので、どうぞご意見ありましたら、どうぞ。

【市職員】
　今日は大変意義のあるご講義ありがとうございました。私は公共施設マネジメントという仕事をしておりまして、公共施設を上手くどう使いこなしていくかという中で非常に文化芸術とかアートが公共施設に対して非常に良い効果があるんじゃないかということで、いろいろ取り組みをやっているところなんですけど、お金が無い中で何か出来ないかなということで、昨年摂南大学さんに住環境デザイン学科さんと建築学科さんが若い准教授にお声掛けしまして、１つめは子育て支援センターの　プラン作りを一緒にやることにしました。それはなかなか良いものが上がってきたんですけれども、次に中塚壮の空間を魅力的にできないかということで先週から取り組みを始めております。そういった自治会と大

学の連携でよい事例もしくは悪い事例。それから本田委員、木ノ下委員、朝倉委員ともに大学に所属しておられますので、こういう連携の依頼は嬉しいとか逆にやめてくれとかあったら教えていただきたいなと思っています。

【会長】
そうしましたら、アートと地域大学とのコラボについて、先生お願いします。

【委員】
私自身は大学との連携の中でも芸術系の大学と地域との連携の事例を中心に見てきましたので、そういうご紹介の仕方になりますが、先ほどご紹介した東京藝術大学の事例が参考になると思います。木ノ下先生がご紹介されましたような地域の大きなアートプロジェクトではないんですけれども、それぞれの地域の住民と大学の教員アーティストが連携しながら地域の持っている底力を高めていった。それをもって地域の居住意欲をどういう風にアップしていくかという視点でこれ10年近く続いているんですけども、その取り組みが大きな一つの事例なんじゃないかなと思います。市内の拠点を使いながらやっていく、例えば「井野団地」とか「戸頭団地」もかつて何回かアートプロジェクトを開催した場所です。それにプラスしてもう少し地道に、例えば団地の地域環境を改善していくときに取り組まれております。
あとは、京都の芸術系大学って大体京都市内に５つくらいあるんですけれども、それぞれ非常に地域の連携で工夫されていまして、特に京都市立芸術大学、地域の団地の小学校にアトリエを作ってもらって、小学校も生徒数が減っていますから空き教室が出来ますので、アトリエにして、芸大の学生にそこで作品制作をやってもらいます。子どもたちはその休み時間にアーティストは今何をやっているのかということを覗いて、自然とその美術の感覚が身に付いていくような取り組みをされていて、非常におもしろいんじゃないかと思うんです。
こういう形の取り組みは他でもいくつか事例が出来ていますので、もし門真の小学校で空き教室がありまして、活用できるようなスペースがあるとすれば、ぜひ、芸術大学あるいは専門学校の連携の中でアーティストの活動の場として使ってもらうというのも一つのやり方かなと思います。これは市長へのご提案ということで。はい。

【会長】
建てるまでの仮設的な意味合いで施設ですね。市の芸大とプロジェクトで居酒屋カフェ兼ギャラリーみたいなの作っていまして、建物も結構面白いですし、結構地元の人と交流の場になっていて、ちょっと閉ざされたエリアだったんですがずいぶん大きくなったと思います。先生のおっしゃった仮設の特別展みたいなパワーを利用しているんじゃないかと思いますけれども、どうですか、これはあまり効果ないと。

【委員】

そうですね、大学とか４年とか６年とかそういう単位でサイクルがあって、就職活動が入るともっと短くなる、大学単位でいくというよりも、ゼミ単位でいかれるということをおすすめします。やっぱりその才能が違うということと、大学単位で行くと逆の立場で例えば、行政機関にこれやらしてくださいっていったときに、あちこちいって結局実利が無かったみたいな事になりがちなので、やめた方が良いっていうよりも、大学単位になると話が大きくなって本当にやりたいことを失ってしまい、どちらかというと、例えば私たちもプロジェクトをする時に自分たちがやりたいミッションやテーマをきっちりと見極めて、これをするならば誰をパートナーにしたらいいかと、それは展覧会と一緒ですが、それをやっている専門的な活動をしているゼミだったりとか、それは別に地域に限らず、多分いろんな課題を逆に言えば誰か探していると思う。そういった所にアクセスしていって、こういう事を一緒にしませんか、という積極的な提案をしていかれる、そのためには自分たちの課題を見極めつつ、相手の専門性を考えながらマッチングしていけると、別に地域に限らず、どこの大学でも乗ってくるかもしれないですし、やっぱり大学も文化庁とか産業経済省とか色んな所に助成金を取る時に、地域との連携をまず申請書の中に盛り込むということもあったりしますので、やっぱり自分たちの課題と合致するなという所を、割ときっちりリサーチされるのだったらおすすめかなと。それは本当にいろんな事例がありますので、まずはご自身達で何か課題がなのかっていうことと、それをやっているところはどこなのか、大学なのか、NPO なのかいろいろ調べてみることも必要なのかなと思いました。

【会長】
ありがとうございました。ネットワークみたいなのが大事だということですよね。個人的なネットワークからむしろ入っていかれるという風なかたちの。

【委員】
大学の特性上、芸術関係はないんですけども例えば寝屋川市の場合ですと、教育になるんですけども、吹奏楽の指導者を市外派遣するようなことはやっています。うちの大学で言いますと、土居商店街の活性化という事で、土居ジャズフェスティバルという所でボランティア、部の学生とゼミ単位での参加、音楽関係団体の参加ということで、土居商店街の活性化、日常的にもやっているみたいなんですけども、そういう取り組みをやっていますので、大学は地域連携に非常に積極的です。補助金の問題もあるので積極的に取り組んでいる姿勢を見せないといけないので、ご存じだとは思いますけど、うちも地域連携室がセンターでやっていますので、大学から正直言うと連携したくてしょうがないです。　ぜひ、広く声をかけてやられたらどうかと思います。

【会長】
他にありますでしょうか。それぞれの仕事の立場で今のようなご意見有るのではないかと思います。特に目立った質問はないかもしれませんが、感想やご意見あれば。
【委員】

先生のオーケストラの話に興味を持ちました。私も第九実行委員をしており感じておりまして、１回目のパナソニック ES 吹奏楽で一緒にしたのですが、アンケートを取ったところ第九は吹奏楽じゃなくてオーケストラでという意見がありまして、２回目はお金がかからないオーケストラの紹介がありまして実際しますとかなりのお金が掛かりました。市民の皆さんはすごい、歌っているのが素人なのに素晴らしいという感想をいただきましたが３回目の時はやっぱり自分たちでオーケストラを呼んでするっていう予算はなかなかできなくって、ほかの演奏会で、打楽器やエレクトーンだけで第九コンサートをやってらっしゃるのを見まして、それでやってみようとなって２年続きました。先生がおっしゃるように、もし市民オーケストラができればそういう心配もなく、皆さんの希望通りできるのではないかなと思います。やっぱりすごくお金のかかることですが進めていただけけたらと思いますね。

【会長】
登委員、いかがでしょうか。

【委員】
ありがとうございました。委員の海外のお話、絵画と写真のご説明楽しかったです。大きな目で見させていただくと、日本の国花の桜。門真に目を向けると、市内にも　　たくさん美しい桜が咲いているところもあります。そこを、ふわっと優しいイベントに　　変えていけたらなと思いました。

【会長】
垣内委員いかがでしょうか。

【委員】
展示ができる場所が少ないので、もっと展示ができる機会や場所を作ってもらいたいです。

【会長】
ありがとうございます。またその辺り審議会の方で意見交換しながら進めていただきたいと思います。まだ時間ありますけどどうでしょうか。どうぞ。

【市職員】
委員のお話ですけれども、文化を生かした交流人口増加のイメージはしやすいんですけれども、果たして文化を取り入れていくときにどのようにして具体的に定住人口が増えていくのか、というところが正直分かっていないのがありまして、他の事例とかありましたら教えていただけたらと思います。

【委員】

資料として見せたところすべて、交流人口から徐々に定住人口に変わっていくという流れが基本的にはあります。特に海外はすごく長く歴史があるので、本当に文化推進していると思うんですけども、日本でこういうことが行われたのは 90 年代のバブル崩壊後、さらに 2000 年以降っていうことなので、まだまだこれからだとは思うんですが、例えば別府とか、瀬戸内とか、新潟とかいくつかお見せしたと思うんですけど、すべてここで芸術祭を３年に１回か２年に１回か行うってことは、それを運営する人が必要なんです。ということはそこで住まなくちゃいけない、イベントに見えがちなんですけども、そこを運営する母体を作ることによっての定住化ということで、この間、地元の人と新しくやってきた人達がそこを回していく、さらにメインでやっている３年に１回以外の時の出来事を自分達で企画運営をしていくというのができているようです。やはりシンボルのイベントと思われるかもしれないですけども、それをやっていくための準備だったり、例えば何が魅力かって掘り起こす時にリサーチから始まるんですよ。アーティストとか、その時の田植えをする人が必要。あるいは事務局が必要です。一見イベントに見えるんですけども、それを運営していくための定住人口がまず絶対的に増えていくっていうのはあると思います。普通そういうことによって、じゃあフェスティバルは空き地で自分は卒業するから、ここでしばらくその作品を活用してやっていこうねって話になるかもしれませんし、横浜とかはあえて空きスペースを若い大学の人達にすごく安い賃料で貸し出していたり、行政ができる緩和ですよね、規制の緩和をどこまでやるかということにおいて、違うのかなと。あと、特に用地でもいいとか、あるいは原状復帰しなくていいとか、そういう風な物件をいかに探せるかっていうのも極めて大きな定住化のきっかけかなと。それは別に　民間の不動産業者だったり、空き家ですよね。空き家対策に対してどうやっていけるかと。大阪府でたくさん繁華街を復興するプロジェクトあるんですけども、南とか北とか、そこは大家さんや不動産屋の人達が店舗をどの土地に建てるかということで、ある種家賃集収入も含めながら、作る不動産ってかたちで展開していくと、結果的に定住化していく。だからイベントやっているように見えるんですけども、そのプロセスに人が住まざるを　えないということが起きてくる。ただ、今お見せした所はほぼ全て交流人口が定住人口化していくっていう事例になります。あとはマイナスをプラスに変える力っていうのがあると思います。どうしようもない、産業的に経済的にはどうしてもマイナスでも、発想の転換によって使いこなすっていうのが創造性だと思うので、逆に皆さんが先ほど庁内連携の中で魅力を掘り起こしていますが、課題を掘り起こすというのがすごく重要だっていうのはそういうことなんですよ。

【委員】

先生の話を捕捉しますと、こういったプロジェクトでよそから来て定住したっていうアーティストとお会いしたのですが、一人は藍染めの方なんですね。竹田という土地でそこの町なかで藍染めをやってらっしゃって、よそから引っ越してきて藍染めの店を　開いて、ハンカチだとか手ぬぐいを売ってらっしゃって、もう一人の方は大阪から竹田の方に定住したんですけど、竹工芸がやりたいということで竹田市が学校をアトリエに改装して、ど

うぞアーティストさん来てくださいという形で募集しているのを聞いてきました。ということで、アトリエはその山の中の学校でされていて、それをこれから全国的にしていこうということで、やっぱり場と機会ですね。それぞれの専門分野から見て、何か魅力があるなというような場を用意してあげて、その情報を発信して繋いでいくシステムが　あれば、活性化するのでは。また斑鳩では、斑鳩の全高校生にアンケート取ったんですよ。そうすると自然環境、文化環境については評価高いんですけども、残念ながら大学はないので、一旦外に出ないと行けないので、高校生の希望を聞くと、斑鳩で働ける場所があったらまた戻ってきて働けたらなという希望があって、地域の文化資源を生かした仕事起こしが一番大事な課題じゃないかなと思います。

【会長】
　ありがとうございました。だいぶ終盤にかかって参りましたので、市長何かございますか。

【市長】
　皆さんいろいろありがとうございました。いろいろお話聞かせていただいた所で、非常に感じたことっていうのはとりあえず、まずは門真市で取り組んできたことをちゃんときちんと振り返る必要があるのかなということを非常に感じました。
　様々な流れの中で財団がなくなったりとか、いう経緯もありますけど、それよりも以前から取り組んできたことを１回きちっと振り返っておかないと、正直に言いますと若い世代の職員というのは全然その時の経緯っていうのは知らない。当然それっていうのは行政で携わってやってきたわけではなく、それに関わってきた市民の方々もたくさんいらっしゃるわけですね。そこもちゃんとした資源なんだろうと思っているんです。
　そういったところっていうのが、地域の中で高齢化されたものの、まだまだ残っておられたりとか、また新しく門真市で文化的な資源を掘り起こしていく過程の中で、今言われる交流人口とか定住人口になっていく流れを作っていこうと思ったとしても、そういったところとしっかり連携していかないといけないのだろうと。だから何もない土壌の中で、作っていくのではなくて、過去にあったものっていうのを上手く掘り起こすなり、継承していくやり方をまず考えるためには、ここ 10 年 20 年くらいのスパンで取り組んできたもの、どんな方がどんなかたちの事をやってきたかっていうのを、いろんな分野があったと思いますんで、それを整理しておく必要があるのかなというのを非常に感じたところです。
　その中で今、言われる他市での取り組みも含めて、とはいうものの門真というのは独特の地域性がありますので、ちゃんと根付くようなものをしっかり選別しながら戦略的に考えていく必要があるのかなという風に思った次第です。

【会長】
　２年ほど前に総務省の若手が中心になって、各地を横断で「不安な個人、立ちすくむ国家」というのを立ち上げましてですね、それは言われた通りじゃなしに、若手自ら集まって、国の危機、個人の不安というものをどう考えるかということで横断的に意見を集めて、

非常に優れた、また網羅された自主的提言を作られネットで発信されたんですけれども、そんなようなものを文化芸術施策のために、今日お集まりいただいた方々で、まとめていっていけたらいいなと思っております。意見出尽くしたようでございますが。

【事務局】

本日は、審議会各委員の先生方には、早い時間からありがとうございました。賜りました提言を参考にさせていただきまして、今後、文化芸術推進に関する実り多き計画づくりに取り組んでまいりたいと思います。また、各職場からの職員の皆様にはご参加いただきありがとうございました。

それでは、これを持ちまして、30 年度第 1 回目の文化芸術審議会「シンポジウム」を閉会させていただきます。